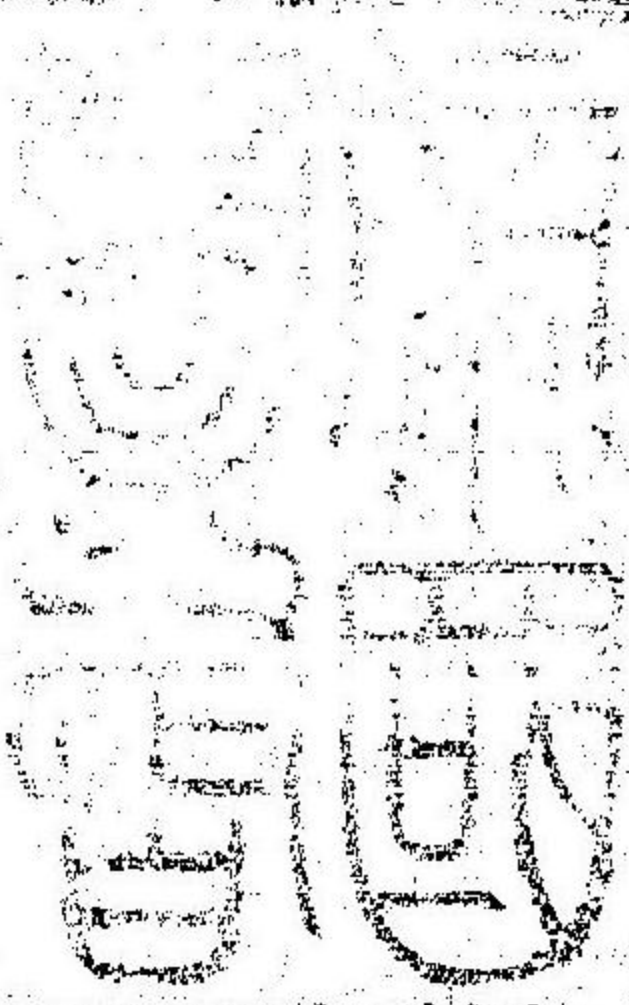


45

獨逸國權限爭議制度一斑



獨逸ナードヒール博士所説(ステンゲル行政法字典第一卷八〇八頁以下掲載)



我國權限爭議ノ制度未タ備ハテス唯第十六議會ニ提出セラレタル權  
限裁判法案アルノミ本編ハ近ク法制局ニ於テ纂譯セラレタルモノニ  
係ル行政法ノ一部タル本制度ノ研究ニ資スル爲メ茲ニ掲載スルコト  
トセリ

緒論

二個以上ノ官廳ノ間ニ一定ノ場合ニ職權ヲ以テ之ニ干與スヘキ權利義務カ其孰  
レニ屬スルヤノ争アルトキハ上級行政廳ノ裁決又ハ上級司法官廳ノ裁判ニ依リ  
テ之ヲ解決スヘキコト當然ノ事理ナリ但管轄ヲ異ニスル官廳間ノ争ニシテ關係

獨逸國權限爭議制度一斑 緒論

036482-000-1

ン-45

獨逸國權限爭議制度一斑

ナードヒールノ所説

[M35?]

BBR-0163



大臣ノ妥協ヲ見ル能ハサルトキハ國家ノ元首又ハ内閣ニ於テ之ヲ裁決セサルヘ  
カラス

然リト雖モ行政廳ト裁判所トノ間ニ生スル權限爭議ハ特別ノ分類ニ屬スルモノ  
ナリ蓋シ裁判所ハ沿革上ノ理由アリテ特殊ノ地位ヲ有スルト裁判所ノ裁判ハ特  
殊ノ性質及ヒ效果ヲ有スルモノタルトニ因ル此場合ニ於ケル權限問題ハ司法行  
政ノ事務ニ屬セスシテ裁判行為ニ關スルモノナルカ故ニ關係大臣ト司法大臣ト  
ノ協議ニ依リテ之ヲ決スルコトヲ得ス是ニ於テカ判決ノ公平ヲ保障スルニ足ル  
ヘキ組織ヲ有スル特別ノ官廳ヲ設ケ之ヲシテ係爭事件ヲ裁判セシムルノ必要ヲ  
生スルニ至ル斯ノ如ク權限ニ關シテ司法ト行政トノ間ニ生スル爭議ヲ稱シテ權  
限<sup>パシフィック</sup>爭議ト云フ或事件ニ關シテ行政廳及ヒ裁判所カ共ニ其權限ニ屬スルコトヲ  
主張スルトキハ之ヲ積極權限爭議ト名ケ二者共ニ其權限ナキコトヲ主張スルト  
キハ之ヲ消極權限爭議ト云フ後ノ場合ニ於テモ亦裁判所ノ裁判ト行政廳ノ裁決  
トハ共ニ獨立的ニシテ其間ニ何等ノ關係ナキカ故ニ二者ノ上ニ立ツヘキ特別ノ  
官廳ヲ設ケ之ヲシテ其事件ヲ裁判セシムルノ必要アルナリ唯此場合ニ於テハ行

積極權限  
爭議  
沿革

政廳ト裁判所ト共ニ其權限ナキコトヲ主張スルモノナルカ故ニ之ヲ權限爭議ト  
稱スルハ決シテ穩當ノ語ニアラサルノ差アルノミ  
權限爭議ノ提起ト爭議ノ提出トハ彼此相混同セサルコトヲ要ス所謂爭議ノ制度  
ハ別ニ爭議ノ條ニ於テ之ヲ説明スヘシ

第一章 積極權限爭議

第一節 沿革

獨逸古帝國時代ノ原則ニ依レハ國主<sup>ランゲスヘル</sup>ノ公權力ニ依リテ臣民ノ權利ヲ侵害シタル  
場合ニ帝國裁判所ハ個人ノ非<sup>エキストラニヂチアルアベラチオン</sup>常<sup>上</sup>訴<sup>ニ</sup>基キ之ヲ裁判スヘキモノニシテ帝  
國裁判所ハ即チ諸領國主ノ上ニ位スル裁判所トシテ最上ノ審級ナリシナリ故ニ  
多數ノ獨逸諸國ニ於テハ帝國ノ滅亡ニ至ルマテ權限爭議法ノ制定ヲ見ルニ至ル  
ヘキ前置條件ヲ具ヘサリキ

獨リ普漏西國ニ於テハ然ラス此國ニ於テハ非常上訴ノ制度ノフリードリッヒ・ヴァル  
ヘルム第一世ノ時代ニ於テ事實上既ニ行ハレサルニ至レリ當時恰モ等族制度<sup>階</sup>  
級制度既ニ衰ヘ新ニ警察國ノ時代ニ入ラントシツ、アリシ時ニ際シ新舊二元素

ハ互ニ相衝突セシカ裁判所ハ専ラ等族ノ特權ヲ擁護セントセシカハ政府ハ裁判所ノ專横ニ當ラシメシカ爲メニ益々行政官廳ノ權限ヲ擴張セリ且國庫カ一方ノ當事者タル場合ニハ私法上ノ係争事件モ亦悉ク之ヲ軍事内務局ノ裁判ニ繫屬セシムルノ制アリ故ニ裁判所ト行政官廳トハ其權限ヲ争ヘルコト數ナリキフリードリッヒ、ザルヘルムハ此弊ヲ矯メンカ爲メニ一方ニ於テハ實質的權限法規ヲ制定シ且故ナク權限ノ争議ヲ開始セル官吏ニ加フヘキ罰則ヲ定メ又權限争議ノ容易ニ落着セサルモノハ國王自ラ之ヲ裁斷スルコト、セリ後千七百四十九年六月十九日ニ至リレゾットレイブルマン主管規則ヲ發シテ之ヲ司法部及ヒ總務局ニ委ヌ而シテ千七百五十年四月二十七日ノ勅令ニ依レハ上述ノ官廳ニ於テ各其所屬官吏ノ一名ヲ命シテ權限争議ノ審理ニ當ラシムヘキモノトセリ此委員會ハ久シカラズシテ委員ノ數ヲ增加セシカ千七百五十六年二月十日ノ訓令ヲ以テ獨立ノ常置官廳トナリ司法會議體及ヒ軍事内務局間ノ管轄争ヲ裁判スルカ爲メノ管轄劃定委員會テフ名稱ヲ附セラル、ニ至リス

此官廳ハ千八百八年ノ行政組織改革ノ後廢絶ニ歸セリ千八百八年十一月二十六

日ノ勅令ハ從來行政カ司法ノ區域ニ侵入セシ狀態ヲ一掃シ二者ノ權限ハ専ラ其取扱事務ノ法律上ノ性質ニ基キテ其限界ヲ定ムルコト、シ私法上ノ争議事件ハ國庫カ當事者ノ一方タル場合ニモ悉ク之ヲ通常裁判所ニ委ヌルコト、セリ此時ニ至ルマテハアルゲマイネストランドレヒト普通國法典總則第七十條第一編第十一章第四條乃至第十條第二編第十三章第五條乃至第十六條ニ所謂ベエスチーツツントホーハイツレヒ尊榮權及ヒ高權ニ關スル争論ヲ惹起スヘキ事項ハ之ヲ軍事内務局ノ權限ニ屬セシメタリキ軍事内務局ハ訴訟手續ヲ爲スカ爲メニ文書ヲ司法部ニ致スヘキカ抑モ亦法律上裁判手續ヲ禁セシモノナルカ故ニ一片ノ命令書ヲ以テ之ヲ處斷スヘキカノ問題ハ局ノ内部事務トシテ他ノ容喙ヲ許サ、リシモノナリ然ルニ裁判所ハ此時ヨリ以降專ラ裁判權ノ行使ニ任スルニ至リシカ故ニ一定ノ場合ニ權利侵害カ國家高權ノ行使ニ依リテ生スルモノニシテ從テ通常裁判手續ヲ認メサルモノニアラサルヤノ問題ヲ裁判セサルヲ得ス然レトモ他ノ一方ニ於テハ千八百八年ノ勅令ハ國家高權ニ關スル裁判所ノ裁判ハ依然禁止セラレタルモノトスル原則ヲ墨守セリ故ニ此點ニ關シテ裁判所ト行政廳トノ間ニ意見ヲ異ニスルコトアルヘク其意見協ハサルトキハ權限争議ヲ提

起スルモ亦勢ノ已チ得サルニ出ツ斯ノ如ク權利侵害カ國家高權ノ行使ニ依リテ生セシモノナルヤ否ヤノ問題ニ關スル意見ノ衝突ハ近世ノ權限爭議ヲ胚胎セシ所以ナリ然レトモ千八百八年ノ勅令ハ權限爭議手續ノ詳密ナル規定ヲ包含セス單ニ爭議ハ上級官廳ニ於テ之ヲ裁判スヘシト云フ規定ヲ爲スニ止マル

千八百二十八年六月三十日ノ閣令ハ司法部及ヒ關係主管大臣ノ協議ニ依リテ決定セサル權限ノ爭議ハ凡テ之ヲ內閣ニ送致シ之ヲ審査研究シテ參考意見ヲ附セシム然レトモ其裁判ハ國王ノ自ラ留保スル所ナリ國王ハ之ヲ最高裁判廷ノ裁判ニ委ヌルコトヲ得ヘキノ定ナリシモ法律ノ施行期限内ニ於テハ實際之ヲ裁判所ニ委ヌルコトナカリキ爭議ノ裁判手續ハ千八百三十五年七月一日ノ訓令ニ依リ佛國ノ制度ニ模倣シテ之ヲ定ム佛國法ニ依レハ千八百八年以前ノ普漏西國ニ於ケルト同シク判事ヲシテ國家行政ノ行爲ニ關シ又原則トシテ國庫事項ニ付テ判決セサルヲ得サルニ至ラシムルカ如キ事項ハ通常裁判手續ニ依ラシムルコトナク之ヲ行政官廳ノ裁決ニ付セシム斯ノ如ク司法權ニ對スル行政權ノ獨立ヲ維持スルカ爲メニ共和第八年雪月五日ノ規則共和第十年千八百二十八年及ヒ千八百

三十一年ノ勅令ノ規定ニ依リ縣知事ニ認容スルニ爭議ヲ提起スルノ權利ヲ以テセリ此爭議ニ關シテハ裁判所カ該事件ニ付キ其行動ヲ繼續シ得ルニ先チ參事院ニ於テ之ヲ裁判セサルヘカラス普國ニ於ケル手續ハ佛國ニ於ケル上述ノ規定ニ模倣シテ之ヲ定メ加之爭議ノ提出テフ非獨逸的名稱ヲ襲踏セリ然ルニ當時ノ輿論ハ公法上ノ事項ニ付テモ亦國權ニ對シテ個人ノ權利ヲ保護スルノ範圍ヲ擴張セントスルニ在リシカハ新制度ニ對シテハ熱心ニ反抗セサルヲ得ス蓋シ世人ハ之ヲ以テ司法ノ權限區域ヲ狹隘ナラシムルモノトシ且裁判所ノ確定力アル裁判ヲ廢スルコトヲ許セシカ故ニ之ヲ以テ裁判所ノ威信ヲ害スルモノトセシナリ殊ニ權限爭議ヲ裁判セシムルニ獨立官廳ヲ以テセス却テ行政部ヲシテ其裁判ニ當ラシムルモノナルカ故ニ當事者ハ裁判セステフ原則ニ戻ルモノナリトスルノ説ハ反對論ノ眼目タリ佛國ニ於テモ千八百四十八年自由主義カ勢力ヲ得タルノ當時一時參事院ノ權限裁判權ヲ奪ヒ獨立裁判所タル權限裁判所ノ制度ヲ見ルニ至リシカ如ク普漏西國ニ於テモ亦輿論ノ反抗アリテ裁判所及ヒ行政廳間ノ權限爭議手續ニ關スル千八百四十七年四月八日ノ法律ノ發布ヲ促カスニ至レリ此法律

ハ判決カ既ニ確定力ヲ生シタルトキハ之ニ對シテ權限爭議ヲ提起スルコトヲ禁  
 セシモノニシテ權限爭議ハ伯林ニ新設セル權限爭議裁判廷ヲシテ之ヲ裁判セシ  
 當裁判廷ハ樞密院議長國務大臣及ヒ樞密院ノ他ノ九名(中五名ハ司法官ニシテ  
 四名ハ行政官)ヲ以テ之ヲ組織シ司法官應ト看做サレタルモノナリ然レトモ此讓  
 步ハ權限爭議制度ノ反對論者ヲ飽カシムルニ足ラス殊ニ千八百五十年一月三十  
 一日ノ憲法第九十六條(一)ニ基キ憲法第八十七條(二)ノ條件ヲ具備セル裁判官ヲ以  
 テ組織スル特別裁判所ヲ設立センコトヲ求ムルノ聲盛ナリシカ此法律ハ帝國司  
 法法律ノ實施ニ至ルマテ其效力ヲ存セリ新領諸州ニ於テモ之ヲ施行ス  
 南獨逸諸國ニ於テハ帝國ノ瓦解ト共ニ帝國裁判所ニ於ケル裁判ノ廢絶シタルノ  
 後佛國ノ制度ヲ輸入セリ巴威倫國(千八百八年五月一日憲法第三章第二條及ヒ千  
 八百十七年四月十五日閣令)瓦望堡國(千八百十九年九月二十五日憲法第五十九條  
 第三號)巴典國(千八百九年十一月二十六日官制追加)第三十七條)曷仙國(千八百二  
 十一年五月二十八日勅令第九條)ノ諸國ニ於テハ行政官廳ニ付與スルニ或法律事  
 項ニ關スル裁判所ノ審理ニ對シテ異議<sup>アインズブルッフ</sup>ヲ提出シ且權限問題ニ關シテ樞密院ノ

裁判ヲ求ムルノ權利ヲ以テス之ニ反シ索遜國ニ於テハ千八百三十五年一月二十  
 八日ノ法律第十八條及ヒ千八百四十年六月三十日ノ法律ヲ以テ權限爭議ノ裁判  
 ヲ特別裁判所ニ委ネタリ後巴威倫國モ亦索遜、普漏西二國ノ先例ヲ襲キ千八百五  
 十年五月二十八日ノ法律ヲ以テ權限爭議ハ最高裁判所ノ評議會ニ於テ公開口頭  
 審理ノ主義ニ依リ之ヲ裁判スヘキコト、セリ評議會ハ每三ヶ年ヲ會期トシ最高  
 裁判所長官評議員三名及ヒ高等行政官三名ヲ以テ之ヲ組織スルモノトス  
 帝國司法法律(裁判所構成法及ヒ民刑訴訟法)ヲ總稱シテ云フノ實施セラル、ト同  
 時ニ上述ノ狀態ハ全ク一變シ權限爭議ノ制度ニ對スル反對論者ノ議論ノ結果或  
 事件ノ通常裁判手續ニ依ラシムヘキモノナルヤ否ヤニ關シテハ裁判所ニ於テ之  
 ヲ裁判スヘシ從テ帝國行政官廳ニ對シテハ權限爭議ノ提起ヲ禁スルノ原則ヲ裁  
 判所構成法第十七條ノ明文ニ明カニスルニ至レリ尙ホ一步ヲ進メ帝國法律ヲ以  
 テ權限爭議ニ關スル諸國ノ法制ヲ一掃セントスルノ計畫アリキ此計畫ハ帝國法  
 律ヲ以テ諸國ノ特別國法ニ干涉スルハ斷シテ不可ナリトスル聯合諸國政府ノ絶  
 對的反抗ノ爲メニ其效ヲ奏セサリシカ諸國ニ於テ權限爭議ヲ裁判スルノ職責ヲ

有スル官廳ノ組織ヲ改メテ裁判所構成法ニ所謂裁判所ヲシメ且權限裁判ノ手續ニ於テモ訴訟法上ノ公開審理及ヒ口頭辯論ノ原則ヲ保障セントスルノ運動ハ雙方ノ互讓和解ヲ促カシ其結果遂ニ上述構成法第十七條ノ第二項竝ニ裁判所構成法施行法第十七條ノ規定ヲ見ルニ及ヘリ前者構成法第十七條第二項ハ諸國ノ法律ニ委任スルニ通常裁判手續ヲ許スヘキヤ否ヤノ問題ニ關シ裁判所及ヒ行政官廳若シハ行政裁判所ノ間ニ生スル爭ハ後ニ説明スル模範規定ニ準據シテ設ケラルヘキ特別官廳ノ裁判ニ委ヌルノ權ヲ以テセルモノナリ(裁判所構成法第十七條第二項ノ模範規定ニ付テハ後段第五節參照)

次ニ施行法第十七條ハ裁判所構成法第十七條ノ爭ヲ裁判スルノ權ハ聯邦内一國ノ申立ニ基キ聯邦參議院ノ同意ヲ經テ勅令ニ依リ之ヲ帝國大審院ニ指定スルコトヲ得ヘキ旨ヲ定ム

聯合諸國中裁判所構成法第十七條ニ掲クル官廳カ同條第一號乃至第四號ノ規定ニ準シ其組織及ヒ手續ヲ一定セサルヘカラサル諸國ニ於テハ法律ノ實施ヲ見ルニ至ルマテニ其國ノ法律ヲ以テ之ヲ變更セサル以上ハ君主ノ勅令ヲ以テ之ヲ變

更スルコトヲ得ヘシ普漏西國政府ハ立法ノ手續ニ依リ普國爭議法ヲ制定シテ帝國法律ノ要求ニ合セシメント試ミタリシカ代議院ハ大體論ヨリシテ權限爭議ノ制度ヲ否決セシカ爲メニ行ハレス已ヲ得スシテ國王ノ勅令ニ依リ其組織及ヒ手續ヲ修正セリ現行法タル行政官廳及ヒ行政裁判所間ノ權限爭議ニ關スル千八百七十九年八月一日ノ勅令即チ是ナリ之ニ反シテ南獨逸諸國及ヒ中部諸國ニ於テハ法律ニ依リテ此手續ヲ行ヘリ巴威倫國千八百七十九年八月十八日ノ法律、瓦敦堡國千八百七十九年八月二十五日ノ法律、巴典國千八百七十九年三月十二日ノ法律及ヒ曷仙國千八百七十九年四月二十九日ノ法律即チ是ナリ

〔一〕 普漏西國憲法第九十六條 裁判所及ヒ行政官廳ノ權限ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム 行政官廳ト裁判所トノ間ニ起ル權限爭議ヲ裁判スル裁判所ハ法律ノ定ムル所ニ依ル

〔二〕 同第八十七條 裁判官ハ終身官トシテ國王躬ラ之ヲ任命シ又ハ國王ノ名ニ於テ任命セラル裁判官ハ法律ノ豫見スル原由ニ基キ裁判宣告ヲ以テスルニアラスンハ其職務ヲ剝奪セラレ又ハ一時其職務ヲ免セラル、コトナシ法

律ニ依ラサル假停職、不任意轉任及ヒ休職ハ法律ニ定ムル原因及ヒ方式ニ依リ且裁判所ノ決議ヲ以テスルニアラスンハ之ヲ行フコトヲ得ス  
裁判所ノ組織及ヒ其管轄區域ノ變更ニ依リ必要トナリタル轉任ハ前項ニ依ルノ限ニ在ラス

權限爭議ノ條件

### 第二節 權限爭議ノ條件

裁判所ニ繫屬セル争カ果シテ通常裁判手續ヲ認ムヘキモノニアラス從テ權限爭議ヲ提起セサルヘカラサルモノナリヤ否ヤノ判斷ハ行政官廳ノ義務トシテ認定スヘキ所ニ屬ス彼ノ往時ノ普國法ニ見ルカ如ク權限爭議ヲ提起スルニ付キ行政官廳カ特別ノ義務ヲ負フノ制度ハ今日ニ存在セス(譯者按スルニ是レ即チ故ナクシテ權限爭議ヲ開始セル官吏ヲ罰スルフリードリッヒ、ヴルヘルム第一世時代ノ法制ヲ指スモノナラン)抑モ權限爭議ハ主張セラレタル請求ヲ判定スルノ權カ憲法上裁判所ニ屬セス却テ行政廳ニ委任セラル、モノタルトキハ何時ニテモ之ヲ提起スヘキモノナリ但通常裁判手續ヲ認ムヘキヤ否ヤノ問題ハ現行法令ニ準據シ實質的權限法ノ原則ニ從ヒテ決セラルヘキ法律問題ニシテ行政ノ便益及ヒ其利

害得失ヲ標準トシテ定ムヘキ事宜問題ニアラサルコトヲ忘却スヘカラズ  
獨逸國ニ於テハ前節ニ述ヘタル如ク特殊ノ沿革アリシカ故ニ權限問題ハ争ニ係ル權利ノ性質殊ニ主タル請求權ノ性質如何ニ依リテ定マルモノナリ佛國法ニ於テハ裁判官カ或事件ノ審理中附隨ノ事務トシテモ行政行為ノ有效無效ヲ判斷セサルヲ得サルニ至ルカ如キ場合ハ總テ爭議ヲ提起シテ之ヲ裁判所ノ手ヨリ奪フコトヲ得ルニ反シ獨逸法ニ於テハ裁判官ハ争ニ係ル私法上ノ請求ヲ裁判スルカ爲メニ必要ナル公法上ノ先決問題ヲ合セテ之ヲ裁判セサルヘカラス故ニ裁判所カ主タル請求ヲ裁判スルノ權限アルトキハ行政官廳ハ此種ノ先決問題ニ對スル裁判所ノ裁判ニ對シテ權限爭議ヲ提起スルコトヲ得サルナリ斯ノ如ク獨逸諸國ノ權限爭議法ハ佛國ノ制度ト其趣ヲ異ニスルカ故ニ權限爭議ハ争ニ係ル主タル請求カ公法的性質ヲ有スルヤ私法的性質ヲ有スルヤノ煩雜ナル審査ヲ經タルノ後ニアラスンハ之ヲ提起スルコトヲ得ス爲メニ權限爭議法ヲシテ甚ダ難解ノモノタラシムルノミナラス此制度ハ本來論理上ノ矛盾ニ出ツルモノニアラサルカノ疑ヲ惹起セシムルニ至ル何チカ論理上ノ矛盾ト云フヤ蓋シ通常裁判官カ公法

獨逸國權限爭議制度一斑

積極權限爭議 權限爭議ノ條件

上ノ先決問題ヲ裁判シ得ルコト明カナルトキハ係争權利カ私法的性質ヲ有スル  
 ナラハ先ツ公法上ノ豫斷問題殊ニ通常裁判ヲ許スヘキモノナリヤ否ヤノ問題ヲ  
 裁判スルノ權限ナカルヘカラス果シテ然ラハ民事訴訟ニ於ケル權限争議ハ法律  
 上ノ根據ヲ失フモノト云ハサルヘカラス帝國法律ニ裁判所ハ或事件ニ付キ通常  
 裁判ヲ許スヘキヤ否ヤヲ裁判スルコト云フ原則ハ論理上當然ノ結果ニシテ其例外ヲ  
 認ムルコト能ハサルカ如シ  
 然リト雖モ上ニ述フルカ如キ議論ハ權限ニ關スル豫斷問題ト前ニ説明セル公法  
 上ノ先決問題トハ同一列ニ立ツヘキモノニアラサルコトヲ看過セルモノナリ裁  
 判官ハ公法上ノ先決問題ヲ裁判スト云フト雖モ如何ナル條件ノ下ニ通常裁判官  
 カ公法上ノ先決問題ヲ裁判スルニ至ルヘキカ即チ争ニ係ル權利カ私法的性質能  
 有スルヤ否ヤノ問題ハ尙ホ未ダ決セラレサル所ニシテ權限問題ノ裁判ヲ待チテ  
 始メテ之ヲ定ムルコトヲ得ヘキモノナリ然リ而シテ權限問題ナルモノハ權限ヲ  
 分界ニ關係アル行政廳ノ異議アルトキハ裁判官ト雖モ單獨ニ之ヲ裁判スルコト  
 ハス裁判所ハ侵害ニ對シテ權利ヲ保護スルカ爲メニ活動スルモノニシテ單純

ナル利益ヲ保護スルモノニアラサルコトヲ思フトキハ益其然ルコトヲ明カニス  
 ルヲ得ン抑モ裁判上訴追シ得ヘキ權利カ存スルヤ否ヤノ先決問題ハ間接ニ原告  
 ノ權利カ認メラルヘキヤ否ヤノ實質的裁判ヲ與フルモノナリ故ニ國權カ裁判上  
 保護セラレヘキ個人ノ權利ヲ認メテ争アル場合ニ通常裁判所ノ權限ニ屬セ  
 サルモノトシ之ヲ行政廳單獨ノ裁判ニ留保スル場合ニ於テ裁判所カ當事者ノ申  
 立ニ因リ他ノ判決ヲ與ヘントキハ是レ實ニ裁判所カ行政廳ノ裁決事項ニ侵蝕ス  
 ルモノニシテ司法權ハ行政ノ權限ニ侵蝕スルモノト云ハサルヘカラス  
 權限争議ノ條件カ存スルヤ否ヤノ問題ハ所謂牽聯問題ノ場合即チ公法上ノ權利  
 カ事實上若クハ法律上争アル私法上ノ權利ニ附着スルトキ又ハ反對ニ私法上ノ  
 權利ノ存在カ一定ノ公權關係ヲ前提トスルトキニ當リテハ殊ニ之ヲ判定スルコ  
 ト難シトス民事訴訟法第三百三十九條ノ規定ニ依リ裁判カ全部又ハ一部行政廳ノ  
 決スヘキ法律關係ノ存否如何ニ依リテ定マルヘキ場合ニ於テハ裁判所ハ行政廳  
 ノ裁決アルマテ訴訟手續ヲ中止スルノ命令ヲ發スルコトヲ得但裁判所カ此權能  
 ヲ行使セスシテ單獨ニ先決問題ヲ裁判スルトモ此裁判ハ判決主文ノ一部ヲ成ス



モノニアラス從テ確定力ヲ生スヘキモノニモアラス又行政廳ノ裁決ニ干涉セシ  
モノニモアラスカ故ニ權限爭議ヲ提起スルノ原因トナルモノニアラス蓋シ行  
政廳ノ裁決ハ之ニ依リテ拘束セラル、コトナケレハナリ既ニ權限爭議ノ原因ト  
ナルモノニアラスカ故ニ此場合ニ於テハ上ニ述ヘタル帝國法ノ原則カ絶對的  
ニ行ハル、モノナリ

上述ノ原則ニ對スル例外トシテ先決問題ニ關スル裁判所ノ裁判ニ對シ權限爭議  
ヲ提起スルヲ得ルコトナキニアラス特別ノ場合例ヘハ普國千八百六十一年五月  
二十四日法律ノ第五條又ハ同國千八百七十二年三月二十七日法律ノ第二十三條  
ノ場合ニ於ケルカ如ク通常裁判官カ行政廳ノ先決ヲ遵奉スルノ義務アル場合ニ  
此義務ニ反シテ之ヲ等閑視シタル場合即チ是ナリ  
反對ノ場合即チ請求カ公法上ノ性質ヲ有スルニモ拘ハラズ通常裁判手續ニ依ル  
コトヲ許シ之ニ關シテ權限爭議ヲ提起スルコトヲ禁スル場合ハ實質的權限法ヲ  
論スルニ當リテ之ヲ説明スヘシ

### 第三節 權限爭議ヲ提起シ得ヘキ事件

權限爭議  
ヲ提起シ  
得ヘキ事  
件

權限爭議ノ制度カ由來スル所ノ淵源ハ二個ノ對照ニ在リ其一ハ行政機能ト裁判  
機能トノ對照ニシテ他ノ一ハ行政官廳ト司法官廳トノ對照是ナリ第一ノ對照ニ  
基キ機能ノ差異ヲ標準トシテ權限爭議ノ制度ヲ立ツルトキハ權限爭議ナルモノ  
ハ實際上ノ裁判行爲ニ對シテノミ之ヲ提起スルコトヲ得ヘシ司法官廳ノ行政  
爲殊ニ非訟事件ノ裁判ニ對シテハ之ヲ提起スルコトヲ得サルモノトナルヘシ次  
ニ第二ノ對照ハ先ツ普漏西國法律ノ上ニ認メラレシモノニシテ權限爭議ハ通常  
裁判所ニ對シテノミ之ヲ提起スヘシ行政裁判所及ヒ地區整理官廳ノ如ク行政組  
織ノ内部ニ在ルモノニ對シテハ之ヲ提起スルコトヲ得サルノ結果ヲ生セリ普國  
地方行政法第百十三條第二項ハ行政訴訟手續ニ係ル事項カ他ノ行政廳ノ權限ニ  
屬スルト云フ主張ニ基キテ權限爭議ヲ提起スルコトヲ許サズ行政廳ト行政裁判  
所トノ間ニ積極消極ノ權限爭議ヲ生スル場合ニ於テハ上級行政裁判所ヲシテ之  
ヲ裁判セシム(同上第百十三條第五項)葛仙國千八百七十五年一月十一日ノ法律第  
五條千八百七十四年六月十二日ノ法律第百十一條ニ依レハ最高行政裁判所ハ權  
限ニ關シテ裁判ヲ下サ、ルヘカラス凡ソ機關ヲ標準トシテ權限爭議ノ制度ヲ定

獨逸國權限爭議制度一斑

積極權限爭議

權限爭議ヲ提起シ得ヘキ時期

ムル普漏西ノ法制ハ行政裁判所及ヒ地區整理官廳ノ如ク行政組織ノ内部ニ在ル  
 モノニ對シ權限爭議ヲ提起スルヲ得サラシメタルコト既ニ述ヘタルカ如シ此法  
 制ノ主義ハ更ニ一步ヲ進メテ通常裁判所ニ對シ權限爭議ヲ提起スルノ權利ニ關  
 シテハ地區整理官廳及ヒ行政裁判所ヲ行政廳ト同一視スルノ原則ヲ採ルニ至レ  
 リ(千八百七十九年八月一日勅令第二十二條懲戒官廳相互間ノ權限爭ニ關シテハ  
 普國(千八百五十二年七月二十一日法律第二十八條參照次ニ巴威倫國(千八百七十  
 九年八月十八日法律第二十九條瓦敦堡國(千八百七十六年十二月十六日法律第七  
 十條)及ヒ巴典國(千八百八十年二月二十四日法律第八條)ニ於テハ行政訴訟及ヒ權  
 利訴訟ニ對シテモ亦權限爭議ヲ提起スルヲ許セリ又事物當然ノ理ヨリスレハ行  
 政廳ト民事裁判官トノ間ニ權限ノ爭アルト同シ刑事裁判官トノ間ニモ之ヲ生  
 スルコトアルヘシ故ニ獨逸諸國ノ特別法ハ刑事事件ニ付テモ亦權限爭議ヲ提起  
 シ得ヘキコトヲ認メ普國往時ノ法律モ亦此見解ニ基ケリ唯刑事ノ事件ニ付キ權  
 限ノ爭議ヲ提起スルコトハ實際上其價值甚大ナラサルカ故ニ普國ニ於テハ千八  
 百七十九年八月一日ノ勅令第四條ヲ以テ民事事件ニ限リ權限爭議ヲ提起シ得ヘ

キモノトセリ

諸國ノ行政廳カ權限爭議ヲ提起スルニハ帝國法律ノ規定ニ依リ之ヲ提起スルト  
 各國法ノ規定ニ基キテ之ヲ提起スルトヲ問ハス  
 之ニ反シテ帝國行政官廳ハ權限爭議ヲ提起スルノ權ヲ有セス故ニ裁判所構成法  
 第十七條ノ條文ハ帝國行政官廳ニ採リテハ絕對的效力ヲ有スエルサス、ロトトリ  
 ンケンニ於テモ亦然リ

#### 第四節 權限爭議ヲ提起シ得ヘキ時期

權限爭議ハ事件カ權利拘束ヲ生スルノ始ヨリ判決カ確定力ヲ生スルニ至ルマテ  
 訴訟手續ノ如何ナル段階ニ在ルヲ問ハス之ヲ提起スルコトヲ得抑モ權限爭議テ  
 フ觀念ハ司法及ヒ行政間ノ爭ヲ前提トスルカ故ニ裁判官カ訴訟手續ヲ開始シテ  
 自ラ其事件ヲ審理スルノ權限アリト主張スヘキコトヲ明カニシタルトキ若クハ  
 千八百二十八年以降佛國ニ行ハル、カ如ク行政部ノ提出セル抗議アルニモ拘ハ  
 ラス裁判所カ其權限アルコトヲ主張シタル場合ニ始メテ之ヲ提起スルヲ得ルコ  
 トヲ原則トス

權限爭議  
 提起シ得  
 ヘキ時期

然レトモ獨逸法ノ原則ニ依レハ權限爭議ハ事件カ裁判所ニ權利拘束トナリタル瞬間ヨリシテ之ヲ提起スルコトヲ得故ニ裁判官カ其事件ニ付キ通常裁判手續ヲ許スヘキモノナリヤ否ヤノ問題ニ關シテ未タ直接間接ニ何等ノ意思ヲ表白セサル間ニ之ニ對シ權限爭議ヲ提起スルコトヲ得ルナリ

斯ノ如キ場合ニ於テモ權限ニ關スル爭ハ既ニ存在セルモノト看做シ之ヲ以テ權限裁判手續ノ大前提トスルモノナリ

確定力アル判決ニ對シ權限爭議ヲ提起スルコトヲ認ムヘキヤ否ヤノ問題ハ嘗テ權限爭議法中議論最モ喧シカリシ問題ナリキ

普國往時ノ法律千八百三十八年七月四日司法省指令ハ確定力アル判決ニ對シテ權限爭議ヲ提起スルコトヲ許セリ以爲ラシ消極論者ノ見ル所ヲ以テスレハ裁判ノ威信ハ絶對的ニ之ヲ保護セサルヘカラサルモノトシ因テ以テ此制度ヲ難スレトモ若シ一旦確定力ヲ生セシ判決ハ到底之ヲ動かスコトヲ得サルモノトセハ行政部ノ威信ハ司法權ノ干涉ニ因リテ侵害セラルヘシ其極行政ノ活動ヲ萎微セシムルノ虞アリト若シ裁判官カ其權限ヲ踰越シテ行政ノ區域ニ干涉スルナラハ司

法官ハ公法上ノ權利ヲ侵害スルモノニシテ其公權侵害タルヤ縱令私訴ノ當事者カ事件ノ訴追ヲ拋棄スルモ之ヲ癒スコト能ハサレハナリ

上述ノ舊制度ヲ廢スルニ當リテハ利害得失ノ政治論與カリテ大ニ力アリシコト固ヨリナレトモ普漏西國カ早クモ千八百四十七年四月八日ノ法律第二條ヲ以テ之ヲ廢止セシハ主トシテ佛國ノ法制ニ模倣セシモノトス佛國ニ於テハ破毀院ノ判決ニ對シテ權限爭議ヲ提起スルコトヲ認メス又控訴審級ニ於テハ一定ノ條件ノ下ニ之ヲ認ムルノミナレハナリ而シテ獨逸帝國裁判所構成法第十七條第四號ノ規定ハ通常裁判手續ヲ認ムルコトカ豫メ特別官廳ノ裁判ヲ申請スルモノナシ

裁判所ノ確定判決ニ依リテ確定シタルトキハ其裁判ハ遵守ノ效力ヲ有スヘキ旨ヲ明カニセリ

是故ニ普國千八百七十九年八月一日ノ勅令第四條第五項ハ其他ノ諸國ニ於ケル法律ト同シク裁判所ノ確定判決アリタル事件ニ付キ權限爭議ヲ提起スルコトヲ禁セリ通常裁判手續ヲ許スヘキモノニアラストスル抗辯カ民事訴訟法第二百七十八條第二項ニ依リ棄却セラレテ確定セルトキ亦然リ故ニ此點ニ於テハ獨逸法

ノ主義カ佛國法ヨリモ一步ヲ進メタルモノト云ハサルヘカラス後者ニ於テハ事件ノ確定判決ヲ以テ權限爭議ノ提起ヲ禁ズレトモ權限ニ關スル中間判決ノ確定シタルカ爲メニ最早權限爭議ヲ提起スルコト能ハサラシムルノ基タシキニ至ラサレハナリ

故ニ大審院ノ裁判ニ對シテハ權限爭議ヲ提起スルコトヲ得サルモノトス

權限爭議  
ノ裁判ス  
ル官廳

### 第五節 權限爭議ヲ裁判スルノ職責ヲ有スル官廳

裁判所カ單獨ニ自己ノ權限ヲ確定スルコトヲ許サズ特別權關ヲ設ケテ之ニ權限爭議ノ裁判ヲ委ヌル場合ニ於テハ其機關ヲ定ムルニ付キ三種ノ方法アリ

第一ノ方法ハ國權ノ最高總攬者タル君主(共和國ニ於テハ立法議會)カ親ラ權限爭議ヲ裁判スルノ權利ヲ留保スルモノナリ或ハ君主ノ親裁ニ先テ豫メ樞密院ニ諮詢シテ其意見ヲ徵シ以テ裁判ノ基礎トスルコトアリ或ハ然ラサルコトアリ此方法ハ佛國ニ於テ千八百四十八年ニ至ルマテ行ハレシモノニシテ其後ナポレオ  
ノ三世ノ時ニモ一時此方法ヲ用ユ伊太利國ニ於テハ千八百五十九年十一月二

十日ノ法律制定以降千八百六十五年ニ至ルマテ行ハル多數ノ獨逸諸國ニ於テ第十九世紀ノ前半期ニ行ハレシモノモ亦是ナリ此制度ハ今日ニ於テハ瑞西國ニ行ハル、モノニシテ國權ノ最高總攬者タル大合議體(即チ瑞西國ノ立法議會)ハ實ニ之カ裁判ノ任ニ當ルモノナリ

主權者ハ司法及ヒ行政ノ權力ヲ總攬スルモノナルカ故ニ二者ノ間ニ生スル爭ヲ裁決スルニ最モ適切ナル機關タル事實ハ君主親裁ノ制度ヲ辯護スルニ足ルモノノ如ク見ユ佛國ニ於ケル司法及ヒ行政ノ事務ノ分配ハ主トシテ外形的關係ニ因ルモノナリシカ故ニ此制度ハ法律上ノ根據アルモノト云ハサルヘカラス其後年之ヲ廢止セシハ政治上ノ理由ニ出テタルモノニシテ敢テ理論上ノ原因アリシニ  
アラス之ニ反シテ獨逸諸國ニ於ケル權限爭議ノ裁判ハ上ニ説明セルカ如ク其性質上裁判行爲ノ一ナリシカ故ニ君主カ權限爭議ヲ親裁スルハ即チ官府裁判ノ制  
度ヲラサルヲ得ス故ニ國法上官府裁判ヲ非ナリトスル意見ノ公認セラル、ト同時ニ直ニ之ヲ排斥セサルヘカラサルコト疑ヲ容レサルナリ

第二ノ方法ハ樞密院ヲシテ權限爭議ヲ裁判セシムルモノニシテ千八百六十五年

三月十二日ノ法律ヲ以テ伊太利國ニ認メラレタル所ナリ然レトモ樞密院ハ最高行政機關ナルカ故ニ之ヲシテ裁判ノ任ニ當ラシムルハ行政廳ヲシテ自己ノ行爲ニ付キ裁判官ヲラシムルモノニシテ決シテ裁判ノ公平ヲ保障スル所以ノ道ニアラサルナリ

最後ノ方法ハ權限裁判權ヲ行使セシムルカ爲メニ司法官及ヒ行政官ヲ以テ組織セテレ同時ニ司法權及ヒ行政權以外ニ超脱スル獨立裁判所ヲ設置スルモノニシテ斯ノ如キハ實ニ司法及ヒ行政ノ地位ニ對シ均等ノ待遇ヲ保障スルニ足ルモノト云ハサルヘカラス此制度ハ佛國ニ於テハ千八百七十二年以降普國ニ於テハ千八百四十七年以降千八百四十七年四月八日ノ法律ヲ以テ伯林ニ新設セラレタル裁判所ヲ以テ此種ノモノト看做スコトヲ得ルナラハ巴威倫國ニ於テハ千八百五十年以降索遜國ニ於テハ千八百三十五年以降成立スル所ノモノニシテ今日獨逸帝國法律ノ認ムル所モ亦是ニ外ナラス

帝國裁判所構成法第十七條第二項ハ通常裁判手續ヲ許スヘキヤ否ヤニ付キ裁判所及ヒ行政官廳若クハ行政裁判所ノ間ニ生スル爭ヲ裁判スヘキ官廳ノ部員ハ任

命ノ當時他ニ擔任スル職務アルトキハ本官在任中然ラサルトキハ終身官トシテ之ヲ任命セサルヘカラス旨ヲ定ム權限裁判官ハ大審院判事ニ於ケルト同一ノ條件ノ下ニ於テスルニアラスハ其官ヲ免セラル、コトナシ  
權限裁判官ノ少ナクトモ半數ハ大審院又ハ控訴院(上級地方裁判所)ノ判事ヲラサルヘカラス裁判ヲ爲スニ當リテハ法定數ノ裁判官ノ列席ナカルヘカラス其數ハ奇數タルヘク且少ナクトモ五人ヲ下ラサルコトヲ要ス

獨逸諸國ハ此模範規定ニ基キテ其權限裁判所ヲ組織セリ普漏西國千八百七十九年八月一日ノ勅令第二條ニ依レハ權限裁判所ハ伯林府ニ其所在ヲ定メ内閣ノ奏薦ニ基キ國王ノ任命スル十一名ノ裁判官ヲ以テ之ヲ組織ス裁判官ハ少ナクトモ年齡三十五歲以上ノモノヲラサルヘカラス其中六名ハ伯林控訴院ノ判事タルヘク他ノ五名ハ高等行政官又ハ判事ノ資格アルモノタルヲ要ス權限裁判官ハ任命當時他ニ擔任セル職務アルトキハ本官在任中然ラサル場合ニ於テハ終身官トシテ任命セラル權限裁判所ハ大審院ノ部會ト同シク(裁判所構成法第四百十條)七名ノ裁判官着席シテ裁判スルモノナリ

巴威倫國千八百七十九年八月十八日ノ法律第二條ニ依レハ權限裁判所ハ一名ノ長官及ヒ十名ノ評議官ヨリ組成スルモノニシテ權限裁判官ハ國王ノ任命スル所ニ係ル長官及ヒ評議官五名ハ最高地方裁判所又ハ控訴院(上級地方裁判所)ノ判事  
中ヨリ任命セラレ他ノ評議官五名ハ行政裁判所評定官中ヨリ任命セラレ  
裁判所ハ七名ノ裁判官着席シテ裁判ス中四名ハ最高地方裁判所又ハ控訴院ノ判事ニシテ三名ハ行政裁判所評定官ナルコトヲ要ス次ニ行政裁判所ニ繫屬スル事件ヲ却下セシメ行政官廳ノ裁決ニ付スルカ爲メニ檢事ノ申立ニ基キ所管省ヨリ  
權限爭議ヲ提起スル場合ニ於テハ高等行政官三名ヲ加入セシムル行政裁判所ノ特別部會ニ於テ之ヲ裁判ス(同法第二十九條)  
瓦敦堡國ノ權限裁判所ハ長官六名ノ裁判官及ヒ一定數ノ代理官ヨリ成ル三名ノ裁判官(長官)控訴院ノ判事ナラサルトキハ四名)及ヒ其代理官ハ控訴院判事中心ヨリ任セラレ其他ノ裁判官ハ高等行政官タル者又ハ嘗テ高等行政官ヨリシ者ノ中心ヨリ任命セラレ  
權限裁判官ハ內閣ノ奏薦ニ依リテ國王之ヲ任命ス權限裁判所ハ又行政裁判所ニ

權限爭議  
提起スル  
官廳及  
ヒ  
權限爭議  
提起スル  
官廳及  
ヒ  
權限爭議  
提起スル  
官廳及  
ヒ

行政訴訟ヲ提起スルコトヲ許スヘキヤ否ヤノ問題ニ付キ裁判スルノ權限ヲ有スルモノトス之ニ反シテ裁判所ト刑罰權ヲ認メラル、其他ノ官廳又ハ軍事裁判所トノ權限爭議ヲ裁判スルモノハ控訴院ノ刑事部ニシテ(院長)合セテ七名ノ判事着席シテ之ヲ裁判ス(權限裁判所ニアラス)瓦敦堡國千八百七十九年三月四日帝國刑事訴訟法施行法第三條)

索遜國ニ於テハ權限裁判所ハ十一名ノ裁判官ヲ以テ之ヲ組織ス中六名ハ最高裁判所ノ判事中ヨリ他ノ五名ハ行政官省ノ參事官中ヨリ任命セラレヘキモノトス十三名ノ裁判官ヨリ成ル巴典國權限裁判所ノ組織モ亦之ニ類ス  
島仙國ニ於テハ權限爭議ハ行政裁判所ニ於テ之ヲ裁判ス  
ブレイトン市ニ於テハ裁判所構成法施行法第十七條ノ規定ニ從ヒ權限爭議ノ裁判ハ千八百七十九年九月二十六日ノ勅令ヲ以テ之ヲ帝國大審院ニ委ネタリ

第六節 權限爭議ヲ提起スル官廳及ヒ權限爭議ノ當事者

權限爭議ヲ提起スルノ權能ヲ有スル官廳ノ區域ハ獨逸諸國ノ國法上大ニ制限セ

獨逸國權限爭議制度一斑

權限爭議ノ當事者

ラル蓋シ權限爭議ハ公法上最モ普通的ノ價值ヲ有スルモノニシテ其裁判ノ當否如何ハ單ニ各個ノ事件ニ止マルモノニアラサルカ爲メナリ普國ノ勅令第五條ニ依レハ權限爭議ハ中央行政官廳及ヒ州行政廳ニ限リ之ヲ提起スルコトヲ得所謂州行政廳トハ州知事州廳州稅務管理局州學校組合嶺山大區伯林警視廳並ニ宗教局之ニ屬ス州行政廳ニ數部局アルトキハ權限爭議ヲ提起スルノ權ハ其總會ニ留保セラル縣知事ノ單獨意見ニ依リテ決セラルヘキ事件ニ付テモ權限爭議ヲ提起スルモノハ縣知事ニアラスシテ總會ナラサルヘカラス何トナレハ縣知事ハ往時ノ縣内政部ニ代ハリタルモノニシテ決シテ獨立ノ新官廳ニアラサレハナリ

巴威倫國ニ於テ權限爭議ヲ提起スルノ權能ヲ有スルモノハ郡廳及ヒ中央政府ノ二者ニ限ラル然レトモ行政裁判所ニ繫屬スル事件ニ付テハ行政裁判所ノ檢事カ該裁判所ノ決議ニ依リ又ハ自己獨立ノ職權ヲ以テ權限爭議ヲ提起スルコトヲ得(巴威倫法律第九條參照)

索遜國ニ於テハ高等行政官廳第三條巴典國第七條曷仙國千八百三十二年九月二十七日訓令第十七條及ヒ瓦敦堡國第七條ニ於テハ中央官廳ニ限リ權限爭議ヲ提

起スルコトヲ得但瓦敦堡國ニ於テハ同一事件カ民事裁判所及ヒ行政裁判所ニ繫屬スルトキニ限リ行政裁判所モ亦之ヲ提起スルコトヲ得斯ノ如ク權限爭議ヲ提起スル權能ハ行政廳ニノミ之ヲ認ムルヲ例トシ通常裁判所ハ決マテ權限爭議ヲ提起スルコトヲ得サルモノトス蓋シ裁判所ハ私人タル當事者ノ申立アルニアラズンハ其活動ヲ開始セサルニ反シ行政廳ハ當事者ノ申立アルヲ待タズ其權限ノ範圍内ニ於テハ憲法上ノ權限分界ヲ侵サ、ラシムルコトニ留意スヘキモノナレハナリ

私人タル當事者ハ積極權限爭議ノ提起ニ與カルコトナシ且地位ノ繼續ニ因リテ權限裁判官ヲ除斥スルコトヲ得ス抑モ私人タル當事者カ權限爭議ノ手續ニ於テ如何ナル地位ニ立ツヘキカハ學說ノ岐ル、所ナリ

リヨトニングハ以爲ラシ權限爭議ノ裁判手續ニ關シテハ固有ノ當事者ナルモノナシ何トナレハ裁判所及ヒ行政廳ハ共ニ國家機關ニシテ國家機關タル裁判所及ヒ行政廳ハ權利ノ主體タルヘキ理由ナキカ故ナリト凡ク權限ノ爭アル官廳ハ民事訴訟ノ通常ノ意味ニ於テ之ヲ當事者ト稱スルヲ得サルコト固ヨリナレトモ荷

獨逸國權限爭議制度一斑

積極權限爭議 權限爭議ヲ提起スル官廳及ヒ權限爭議ノ當事者

モ其訴訟手續タル性質ヲ認ムル以上ハ當該官廳ヲ以テ當事者ト看做サ、ルヲ得  
 ス何トナレハ當事者ナクハ訴訟手續ノ概念ヲ想像スルコト能ハサルノミナラ  
 ス行政訴訟ニ於テモ決シテ官廳ノ權利保護ヲ目的トスルモノニハアラサレトモ  
 官廳カ一方ノ當事者タルコトヲ妨ケサレハナリ正反對ノ見解ハ嘗テ普漏西ノ代  
 議院ニ依リテ代表セラレタリ以爲ラシク權限裁判所ニ繫屬セル民事事件ニ付キ一  
 方ノ當事者トシテ行政廳ト對立スルモノハ裁判所ニアラス原告タル一私人ナリ  
 ト此說ハ權限爭議ノ提起ヲ以テ私人タル原告ノ權利ヲ傷クルモノトスル前提ニ  
 基キ立論セシモノニシテ此權利傷害ヲ甚シカラサラシムル爲メニハ實際ノ訴訟  
 當事者タル地位ヲ私人タル原告ニ認ムヘキコト正義ノ命スル所ナリト云フナリ  
 或ハ說ヲ爲スモノアリ曰ク權限爭議ノ手續ヲ以テ裁判所及ヒ行政廳間ノ爭議ト  
 看做スハ一ノ擬制ニ過キサリシカ此擬制ハ民事訴訟法カ訴ノ裁判上ノ審査ヲ廢  
 シタル以來既ニ打破セラレタルモノト云ハサルヲ得ス何トナレハ既ニ訴ノ裁判  
 上ノ審査ヲ廢シタルカ故ニ行政廳ハ裁判所カ其權限ニ關スル意見ヲ發表スルニ  
 先チ之ニ對シテ權限爭議ヲ提起スルノ權利ヲ有スレハナリ若シ權限爭議ナルモ

ノカ真ニ被告ノ利益ノ爲メニスル行政廳ノ從參加ニ外ナラサルモノニシテ此場  
 合ニ裁判所ニ於テ主張シ得ヘキ權利カ存スルヤ否ヤノ法律問題ヲ裁判官ノ裁判  
 以外ニ置クコトヲ目的トスルモノナリトスレハ訴訟上防禦ノ權利ヲ原告ニ認ム  
 ヘキコト言テ俟タスト權限爭議ヲ以テ行政官廳ノ從參加ナリトスル此學說ハ要  
 スルニ牽強附會ノ譏ナキコト能ハス何トナレハ行政官廳ノ目的トスル所ハ被告  
 ノ勝訴ニ在ルニアララス權限ノ分界ヲ紛淆セシメサルニ在ルモノニシテ縱令行政  
 官廳ノ干涉ニ因リ通常裁判手續ヲ許スヘキモノニアラストスル裁判アリタルカ  
 爲メニ被告ヲ利スルコトナキニアラストスルモ權限爭議ハ其必然ノ結果トシテ  
 被告ノ利益トナルヲ要セサルヲ以テナリ之ヲ制度ノ沿革ニ徵スルモ權限爭議ハ  
 裁判所及ヒ行政廳ノ爭トシテ發達シタルモノニシテ此基礎ノ上ニ建設セラレタ  
 ル訴訟手續ハ一般訴訟法ノ變更ニ因リ原則的ニ變更セラレタルモノト解スルコ  
 トヲ得ス權限爭議ノ手續ハ便宜上ノ理由ヨリシテ必スシモ一般訴訟法ノ規定ニ  
 從ハサルモノナレハナリ尤モ裁判所構成法第十七條及ヒ諸國ノ立法例ハ權限爭  
 議ノ當事者ヲ定メ且當事者ヲ呼出シタル後審理ヲ公開スヘキ旨ヲ定ム然レトモ

獨逸國權限爭議制度一斑

權限爭議ノ當事者



権限争議ニ關シ其意見ヲ發表スルノ點ニ付テハ帝國法及ヒ各國法トモ當事者ヲシテ彼訴訟法カ民事訴訟ノ當事者ニ與フルカ如キ利益アル地位ニ在ラシメザルナリ例ヘハ裁判所ノ職員ヲ忌避スルノ權ヲ當事者ニ與ヘス又民事訴訟法第二百四十三條ノ規定ニ反シ口頭辯論ノ開始以後ニ於テモ争議ヲ取下クルカ爲メニ其同意ヲ得ルコトヲ必要トセサルカ如キ當事者ノ地位ノ決シテ好便ナラサルコトヲ證スルニ足ラン

権限争議ノ手續

第七節 権限争議ノ手續

権限争議ノ手續ハ其大體ニ付テハ諸國ノ立法例概ネ其揆チ一ニセリ權限争議ハ行政廳カ通常裁判手續ヲ許スヘキモノニアラスト恩料スル旨ノ趣意書<sup>エヤクレシテ</sup>ヲ事件ノ繫屬スル裁判所ニ呈出シテ之ヲ提起スルモノナリ此趣意書ニハ理由書ヲ附スルコトヲ要ス趣意書呈出ノ效果ハ權限争議ニ關スル手續ノ繼續中民事訴訟法第二百二十六條第一項及ヒ第二項ニ所謂訴訟手續ノ中斷ヲ生スルニアリ  
訴訟手續ノ中斷ハ法律上當然生スルモノナリ別段ノ命令又ハ千八百四十七年四月八日法律ノ第五條ニ於ケルカ如ク手續ヲ中止スヘキ裁判所ノ裁判ヲ必要トス

ルモノニアラス此點ニ於テハ訴訟法一般ノ規定ニ合致セサルモノナレトモ此例外ハ民事訴訟法施行法第十五條第一項ノ明文ニ依リテ認めラル、モノナリ同條ノ文義ヨリスレハ訴訟手續ノ中斷ニ關スル諸國法ノ條規ハ權限争議ノ場合ニ其效力ヲ存スヘシト云フニ止マレトモ此條文ハ一般ニ諸國ノ國法ヲ以テ新ニ之ニ關スル規定ヲ設クルノ餘地ヲ認メシモノト解セラル  
其外玆ニ所謂中斷ト民事訴訟法ニ所謂中斷ト異ナルノ點ハ民事訴訟法第二百二十六條ノ規定ニ反シ口頭辯論終結以後ニ於ケル中斷モ亦裁判ノ言渡ヲ妨クルノ效力アルコト是ナリ權限争議ノ提起ニ依ル訴訟手續ノ中斷ハ裁判官ニ裁判ノ權限ヲシトスル理由ニ基ツクモノニシテ民事訴訟法第二百十七條、第二百二十三條ノ理由ニ依リテ然ルモノニアラサルカ故ニ其裁判言渡ヲ中止セシムヘキハ事理ノ當然ト云ハサルヘカラス  
案遜國法律第五條ハ反對ノ規定ヲ包含ス其規定ニ依レハ權限争議カ判決ノ言渡前ニ提起セラル、トキハ裁判所ハ果シテ通常裁判手續ヲ許スヘキモノナリヤ否ヤノ決議ヲ爲サ、ルヘカラス其結果或ハ判決ヲ以テ通常裁判手續ヲ許スヘキモ

ノニアラサルコトヲ確定スルカ又ハ裁判所カ通常裁判手續ヲ許スヘキモノトス  
 ル場合ニ於テハ權限裁判ノ終結ニ至ルマテ訴訟手續ヲ中止スルノ決議ヲ爲サ、  
 ルヘカラス裁判所ノ判決カ未ダ確定セサルニ先チ其判決ニ對シテ權限爭議ノ提  
 起アリタル場合ニ於テモ裁判所ハ訴訟手續中止ノ決議ヲ爲サ、ルヘカラス  
 裁判所ハ其從前ノ活動ノ效果ヲ一時中止セサルヘカラス普國勅令第十九條及ヒ  
 巴威倫國法律第十二條ニ依レハ裁判所カ訴訟手續ノ中斷以前ニ爲シタル判決ノ  
 假ニ執行スヘキモノハ職權ヲ以テ一時強制執行ヲ停止セサルヘカラス此裁判ニ  
 對シテハ抗告スルコトヲ許サス

訴訟手續中斷ノ效果ハ民事訴訟法第二百二十六條第一項及ヒ第二項ニ從ヒ期間  
 ノ進行ヲ止メ且中斷ノ期間中一方ノ當事者カ本案ニ付キ爲シタル訴訟行爲ヲ無  
 效ナラシムルニ在リ訴訟ノ原因タル請求權ノ時効モ亦有效ニ訴追スルコトヲ得  
 サル者ニ對シテハ時効進行セサルノ原則ニ依リテ停止セサルヲ得ス

裁判所ハ職權ヲ以テ行政廳ニ其差出シタル文書ヲ受領セル旨ヲ通知シ且訴訟當  
 事者ニ對シテハ行政廳ヨリ差出セル趣旨書ノ謄本ヲ送付シテ權限爭議ノ提起ア

リタル旨ヲ通知セサルヘカラス若シ事件カ上級裁判所ニ繫屬スルモノナルトキ  
 ハ行政廳差出ノ趣意書及ヒ之ヲ當事者ニ通知セルコトヲ證スル送達證書ヲ附シ  
 テ關係書類ヲ第一審裁判所ノ書記ニ送還スルコトヲ要ス

訴訟當事者ハ權限爭議ニ關シ意見書ヲ差出タスコトヲ許サル、モノニシテ一個  
 月以内ニ之ヲ第一審裁判所ニ提出セサルヘカラス訴訟ノ進行ハ裁判所ニ於テ之  
 ヲ行フモノトス裁判所ハ反對當事者ノ意見書ノ謄本ヲ行政廳ニ送付シ又ハ意見  
 書ヲ受領セサル旨ヲ報告シ且普漏西ノ國法ニ依レハ後ノ場合ニハ一個月ノ期間  
 經過ノ後其他ノ場合ニハ意見書受領ノ後關係書類ニ裁判所ノ意見報告書ヲ添へ  
 之ヲ控訴院ニ送付スルコトヲ要ス

控訴院ハ其意見ヲ附シテ之ヲ廻付ス第一ノ意見報告書ハ裁判ニ必要ナルヘキ地  
 方的見解ヲ採ルノ機會ヲ裁判所ニ與フルノ目的ヲ有スルモノナリ彼ノ裁判所カ  
 權限爭議ノ當事者タル地位ニ立ツコトヲ認メサル論者ノ如キハ何カ爲メニ此意  
 見書ヲ呈出セシムルカノ理由ヲ説明スルコト能ハサルヘシ現ニ普漏西ノ代議院  
 ノ如キ意見書差出ノ制度ヲ廢止セント試ミタリシカ行ハレスシテ已ミタリ

司法大臣ハ關係行政廳ノ長官ニ報告シテ關係書類及ヒ裁判所ノ意見書ヲ權限裁判所ニ送ル

裁判所ニ於ケル上述ノ手續ニ準シ州行政廳ハ關係官廳ノ長官ニ權限爭議ヲ提起シタル旨ヲ報告シ且當事者ノ意見書ヲ呈出シテ自己ノ參考意見ヲ報告セサルヘカラス(普國法律第十一條第一項)行政長官ハ權限爭議ニ關スル意見ヲ裁判所ニ差出タスコトヲ得(同第十一條第二項)行政長官ハ又權限爭議ヲ取下ルコトヲ得此場合ニ於テハ關係書類ハ司法大臣ノ手ヲ經テ權限裁判所ヨリ之ヲ事件ノ繫屬スル裁判所ニ返還スヘシ書類ノ返還ヲ受ケタル裁判所ハ職權ヲ以テ權限爭議ノ取下アリタル旨ヲ訴訟當事者ニ通告スルコトヲ要ス(同第十一條)

巴威倫法律第十六條ニ依レハ裁判所ノ意見ヲ徵スルコトナク一个月以内ニ之ヲ權限裁判所ノ檢事ニ送付ス權限裁判所ハ職權ヲ以テ期日ヲ確定シ當事者ヲ呼出シ又部下ノ官吏ニ委任シテ代理ヲシムル權限アル關係行政長官ニ期日ノ定ヲ通告セサルヘカラス權限裁判所ノ裁判ハ裁判所構成法第十七條ノ定ムル所ニ從ヒ口頭辯論審理ノ原則ニ基キ公開シテ之ヲ行フ

瓦敦堡ノ國法ニ依レハ(行政訴訟ニ關スル千八百七十六年十二月十六日法律第二十九條)中間判決ヲ以テ申立ノ却下ヲ爲スコトヲ得

私人タル訴訟當事者ノ代表ニ關シテハ辯護手續ノ原則ニ依ル當事者ハ權限爭議ニ於テハ固有ノ當事者タル資格アル者ニアラサルカ故ニ審理上ノ權限ハ其權利ニシテ義務ニアラス當事者ノ出廷ヲ命スルコトナク又其代理人ノ出廷ヲ命スルコトナシ(普國勅令第十三條)

當事者ノ辯論並ニ行政長官ノ選任セル官吏ノ辯論(巴威倫國ニ於テハ權限裁判所檢事ノ辯論)ハ裁判所長官ノ委任スル裁判官カ從來ノ審理手續ヲ報告セル後ニ於テス判決ノ言渡ハ民事訴訟法第二百八十條、第二百八十一條、第二百八十四條、第二百八十六條、第二百八十八條ノ原則ニ從ヒテ規定セラル

權限裁判所ノ判決ハ單ニ通常裁判手續ヲ許スヘキモノナリヤ否ヤノ點ヲ裁判スルニ止マル毫モ事件ノ實質的裁判ニ容喙スルコトナシ權限裁判ハ此點ニ於テハ妨訴抗辯ニ關シテ裁判スル判決ト同一視スヘキモノナリ  
事件ノ繫屬セル裁判所ハ判決ノ正本ヲ受取リタル後之ヲ當事者ニ送達スルコト

ヲ要ス通常裁判手續ヲ許スヘキモノト判決セラレタルトキ又ハ權限爭議カ取下ケラレタルトキハ民事訴訟法第二百二十七條ノ定ムル所ニ準シテ訴訟手續ヲ續行ス強制執行ノ一時ノ停止ヲ命シタル裁判ハ職權ヲ以テ之ヲ取消サ、ルヘカラス

之ニ反シテ判決ノ要旨カ通常裁判手續ヲ許スヘカラサルモノトスルトキハ通常裁判所ニ於ケル訴訟ハ終了セルモノナリ權限爭議手續ニハ訴訟費用ヲ要セス又差入金及ヒ手数料ヲ徵收セラル、コトナシ

權限爭議ノ裁判ニ對シテハ上訴裁判ヲ認メス

消極權限  
爭議

第二章 消極權限爭議

消極權限爭議ハ一事件ニ付キ一方ニ於テ裁判所ハ之ヲ行政廳ノ權限ニ屬スヘキモノトシ他ノ一方ニ於テ行政廳ハ之ヲ裁判所ノ權限ニ屬スヘキモノトシ二者共ニ其權限ナキコトヲ終局的ニ言明セル場合ニ當事者ノ申立ニ基キテ生スルモノナリ積極權限爭議ハ司法裁判ニ對スル行政裁決ノ獨立ヲ保持スルノ職責ヲ有スルモノニシテ公法上ノ目的ノ爲メニ存在スル制度タルニ反シ消極權限爭議ハ單

ニ當事者ノ個人的利益ノ爲メニスル制度ニシテ司法及ヒ行政分立ノ原則ヨリ生スルコトアルヘキ不利益ヲ除却スルノ目的ヲ有スルモノナリ行政ト司法ト二者相互間ニ何等ノ聯關ナキノ事實ヨリシテ司法權カ行政廳ノ權限ニ關シテ有スル見解ハ以テ行政廳ヲ拘束スルニ足ラズ行政廳カ裁判所ノ權限ニ關シテ懷抱スル說ハ以テ裁判所ヲ動カスニ足ラサルノ結果ヲ生スルモノタル以上ハ一事件ニ付キ二者交互ニ之ヲ他ノ一方ノ權限ニ屬スヘキモノトスル場合ニ個人ノ權利及ヒ利益ヲ保護スルカ爲メニ二者ヲ拘束スヘキ獨立官廳ノ裁判ヲ必要トスルニ至ルコト固ヨリ言テ俟タス此種ノ裁判ヲ求ムルカ爲メニ當事者ノ提起スル權限爭議ハ法律上幾分カ自ラ權限ナシト主張スル國家機關ニ對シ其機能ヲ行使セシムルノ目的ヲ有スル特殊ノ對官廳訴訟タル性質ヲ有スルモノナリ

消極權限爭議モ亦民事事件ニ付テノミ存在スルモノニシテ事物ノ性質上之ヲ刑事ノ事件ニ適用スルコト能ハス加之被害者ノ權利ヲ保護スルカ爲メニハ刑事訴訟法第七十條以下ノ規定アリテ既ニ十分ナルカ故ニ刑事ニ付テ之ヲ認ムヘキ實際上ノ必要アルヲ見サルナリ

行政裁判所ハ原則トシテ行政廳ト同一ノ地位ニ在ルモノト解セラル之ニ反シテ行政廳及ヒ行政裁判所ノ間ニハ消極權限爭議ナルモノナシ蓋シ最高行政裁判所ハ行政廳ノ裁決ニ對スル上級審ナルコト自然ノ理ナレハナリ普漏西國ニ於テハ上級行政裁判所ノ決スル所ニ依ル(一般地方行政法第百十三條)

消極權限爭議ハ例外ノ性質ヲ有スルモノナルカ故ニ之ヲ適用スルニハ無權限ノ裁判カ終審ニ於テ確定セルコトヲ必要トスルモノニアラサルヤノ疑ナキニアラズ然レトモ終審裁判所ノ確定判決ヲ必要トスルモノニアラサルコトハ獨逸法モ亦佛國法ト異ナラス故ニ消極權限爭議ヲ許スニハ積極權限爭議ニ於ケルト正反對ニ裁判所ニ於テ裁判ノ權限ナキコトヲ明言セル判決ノ確定セルコトヲ必要トス(但此判決ハ終局審ノ判決タルヲ要セス第一審ノ判決ニテモ可ナリ)裁判所構成法第十七條第二項第四號ノ規定ハ此原則ヲ妨クルモノニアラス何トナレハ本條ニ規定スル所ハ其文義ヨリスルモ將又其沿革ニ徵スルモ單ニ積極權限爭議ニ限ルモノナレハナリ然レトモ大審院ノ判決ニ對シテハ斯ノ如キ權限爭議ヲ提起スルコトヲ得ス

巴威倫國千八百七十九年八月十八日ノ法律第三十二條及ヒ瓦敦堡國千八百七十九年八月二十五日ノ法律第十三條ハ此制限の規定ヲ包含ス斯ノ如キ規定ハ普漏西ノ勅令ニ存セス且裁判所構成法第十七條第二項ノ規定ハ一般ニ各國法ノ規定ヲ以テ裁判所ト行政廳若シハ行政裁判所トノ間ニ生スル爭議ヲ特別官廳ノ裁判ニ付スルコトヲ得ヘキ旨ヲ定ム裁判所ノ間ニ何等ノ區別ヲ爲スコトナク又大審院ヲ以テ其例外トスルコトナシ然レトモ同條第二項ノ規定ハ其成立沿革ニ徵スルモ又其意義ヨリ察スルモ單ニ各國所在ノ裁判所ニ關スルモノニシテ帝國裁判所タル大審院ニ關スルモノニアラス第二項ノ規定ハ各國ノ特別法ヲ以テ第一項ニ掲ケタル帝國法ノ原則裁判所ハ或事件ニ付キ通常裁判手續ヲ許スヘキモノナリヤ否ヤヲ裁判スト云フモノ是ナリ)各國ノ裁判所ニ適用セサルコトヲ得ヘキ例外ヲ定メタルモノニシテ此例外的規定ハ決シテ之ヲ廣義ニ解釋スヘキモノニアラサルナリ

消極權限爭議ニ付テハ官廳ハ當事者ニアラス蓋シ此制度ハ私人タル當事者ノ利益ノ爲メニ設ケラレタルモノナルカ故ニ權限爭議ノ手續モ亦私人タル當事者ノ

行動ヲ待ツコト其必然ノ結果ナリ往時普漏西ニ於ケル法律ハ職權ヲ以テ消極權  
 限爭議ヲ決スルノ傾向ヲ有セシカ千八百七十九年八月一日勅令第二十一條ノ他  
 ノ立法例ニ於ケルカ如ク佛國法ニ模倣シテ事件ニ關係スル當事者ノ申立ヲ必要  
 トスルニ至レリ當事者ノ申立ハ事件カ第一審ニ於テ繫屬シタリシ裁判所ニ之ヲ  
 爲スコトヲ要ス裁判所ハ職權ヲ以テ之ヲ反對當事者ニ送達セサルヘカラス反對  
 當事者ハ送達ヲ受ケタル後一个月ノ期間内ニ權限爭議ニ關スル意見書ヲ差出タ  
 スコトヲ得其他積極權限爭議ノ裁判ヲ下スヘキ官廳及ヒ權限裁判ノ手續ニ關ス  
 ル條規ハ消極權限爭議ニモ準用セラル權限裁判所ノ裁判ハ其判決ニ牴觸スル通  
 常裁判所ノ裁判若クハ行政廳ノ裁決ヲ廢棄シ其事件ヲ審理シ裁判スルカ爲メニ  
 之ヲ該審級ノ裁判所又ハ行政廳ニ下戻スニ在リ行政廳及ヒ裁判所ハ共ニ權限裁  
 判所ノ裁判ニ拘束セラル裁判官ハ更ニ開始セラレタル訴訟手續ニ於テ再ヒ之ヲ  
 其權限ニ屬セストスル裁判ヲ爲スコト能ハサルナリ

結論

權限爭議ノ制度ハ非難最モ甚クシカリシモノナリ論者以爲テク裁判行爲ハ裁判

結論

所ノ職責ニ屬スルモノニシテ行政ノ事タル便宜如何ノ點ヨリ國家ノ目的ヲ實行  
 スルノ手段ニ外ナラス行政ノ活動スルハ法律ヲ以テ其準繩トシ制限トスルモノ  
 ナレトモ爭アル各個ノ事件ニ關シ法規ヲ維持スルノ作用ハ行政ノ範圍ニ屬セサ  
 ルモノナリト此學說ハ碩學ヘールノ盛ニ鼓吹セシ所ニシテ公法上ノ個人自由權  
 ナ侵害スル行政行爲ニ對シ通常裁判所ニ救濟ヲ求ムルノ道ヲ開カントスルノ目  
 的ヲ有セシモノナリ此說ニ依レハ凡ソ法律上ノ理由ニ依リテ決セラルヘキ事件  
 ハ行政ノ固有ノ範圍内ニ於テモ亦悉ク之ヲ通常裁判所ノ裁判ニ屬セシメサルヲ  
 得サルニ至ル然ルニ行政ノ固有ノ範圍内ニ於テハ特別裁判所ヲ設置セシカ故ニ  
 普漏西國ニ於テハ此學說ノ侵入ヲ見ルコトナカリキ獨リ權限爭議ニ關シテハベ  
 ール一派ノ所說尙ホ其勢力ヲ存スルヲ見ル何トナレハ權限爭議ノ場合ニハ司法  
 ト行政トハ權限ニ關スル法律問題ノ裁定ニ付テ相對スルモノナレハナリ  
 此學說ノ目的ハ沿革的ニ發達セル三權分立說ヲ打破セントスルニ在レトモ一方  
 ニ於テハ行政廳ト雖モ有效ニ社會全體ノ利益ヲ圖ラント欲セハ廣濶ナル裁決權  
 ナ缺クコト能ハサルノ道理ヲ看過スルモノナリ行政廳ハ其裁決ヲ下スニ先チ必

ス裁決ノ權限ヲ有スルヤ否ヤノ問題ヲ決定セサルヲ得ス争アル場合ニハ個人ニ對シテ此權限ヲ確定セサルヘカラス裁判權ヲ舉ケテ之ヲ裁判所ニ一任セントスルノ說ハ行政ヲ恭微振ハサラシムルノ結果行政ノ全部ヲ以テ裁判所ニ委ネサルヲ得サルニ至ラシムルモノナリ何トナレハ廣濶ナル裁判行爲ノ權能アルニアラスノハ到底秩序アル行政ヲ想像スルコト能ハサレハナリベール信奉者モ亦此最モ著シキ不利益ヲ避ケンカ爲メニハ例外ヲ設ケテ國家行政ノ範圍内ニモ例ヘハ外交政策及ヒ國際法ノ適用等ノ如ク通常裁判ノ力ニ及ハサルモノアルコトヲ認メサルヲ得サルヘシ然レトモ此等ノ學者カ例外視スル所ノモノハ實ハ國家行政ノ全部ニ亘リテ存スルモノニシテ通常裁判所ノ裁判ハ社會一般ノ利益ト一致シ得ヘキ範圍外ニ出テ、之ヲ認ムヘキモノニアラスト云フ通則ノ適用ニ外ナラス若シ裁判所カ單獨ニ自己ト行政廳トノ間ニ存スル權限ノ分界ヲ定ムルコトヲ得ルモノトシ殊ニ司法裁判所カ行政ノ區域ヲ侵蝕スルコトヲ禁セサルハ此通則ニ反スルモノナリ論者ト雖モ他ノ區域ニ於テハ總テノ審級ヲ通シテ改ムルコトヲ得サル裁判上ノ錯誤アルコトヲ認メ之ニ對シテハ裁判所ノ裁判以外ニ救済ノ道

ヲ講セサルヘカラスアル必要アルコトヲ認容スルコトアラサヤ消極權限爭議ノ制度ニ付テハ反對論者ト雖モ非難ヲ加フルコトナキナリ論者ハ消極爭議ニ付テハ當事者ノ利益ノ爲メニ司法部及ヒ行政部ヨリ超脱スル獨立官廳ノ裁判ヲ必要トスルモノナルカ故ニ裁判所ハ單獨ニ自己ノ權限ヲ裁判スルモノナリト云フ原則ハ此點ニ付テハ之ヲ打破セサルヲ得サルコトヲ認ムルモノナリ斯ノ如ク消極權限爭議ニ付テハ當事者ニ認ムルニ獨立官廳ノ裁判ヲ仰クノ權利ヲ以テスルニ拘ハラス何カ故ニ積極權限爭議ニ付テ之ヲ行政官廳ニ認ムルコト能ハサルカ彼ニ在リテハ裁判官モ亦錯誤ニ陥ルコトアルヘキモノトスルニ拘ハラス何カ故ニ行政廳ニ對シテハ之ヲ豫見シ得サルモノトスルカ解スヘカラス論者カ消極權限爭議ノ制度ヲ認ムルハ果シテ他ノ理論的根據ニ基クモノアルカ若シ然ラサルモノトセハ是レ即チ積極權限爭議ニ對スル論者ノ非難ハ誤リタル前提ニ基クモノナルコトヲ間接ニ自白スルモノナリ抑モ裁判官ハ行政部ニ對シテ公平私ナキコトヲ期スヘカラス何トナレハ當事者ハ反對當事者ニ對シテ妨訴ノ抗辯ヲ提出スルモノナレトモ行政廳カ自己ノ權限ヲ主張スルハ裁判所ニ對シテ妨訴ノ抗辯ヲ爲ス

モノナレハナリ然ラハ則チ通常裁判所ヲシテ権限問題ヲ裁判セシムルハ裁判所  
 ナシテ自己ノ事件ニ付キ裁判官ヲラシムルモノニシテ當事者ハ裁判セスト云フ  
 法治國ノ主義ニ違背スルモノタルヲ免カレス例ハ裁判所カ同等ノ地位ニ在ル  
 裁判所ト其管轄ヲ争フニ當リ單獨ニ自己ノ権限ヲ定メ之ヲ他ノ一方ニ強ユルト  
 異ナルコトナシ此場合ニ上級裁判所ヲシテ之ヲ裁判セシムルヲ要スルハ裁判所  
 構成法ノ原則トシテ認メラル、コト明カナル以上ハ権限争議ニ付テハ司法及ヒ  
 行政ノ上ニ位スル特別官廳ノ裁判ヲ必要トスルコト固ヨリ深ク論スルニ足ラス  
 以上権限争議ノ制度ニ對スル本質上ノ非難ハ何等ノ理由ナキコトヲ明カニシタ  
 リ便宜上ノ問題トシテ此制度ヲ非難スルノ説ニ至リテハ遙ニ大ナル價值ヲ有ス  
 便宜上ノ理由トハ権限争議ニ依リテ事務ノ澁滯スルコト即チ是ナリ殊ニ普漏西  
 國ニ於ケル手續繁雜ナルコト及ヒ事務益多端ニシテ其弊ニ堪ヘサルコトハ皆有  
 カナル反對論ノ根據ナリ或ハ論スル者アリ曰ク公衆ノ多數カ未タ其價值ヲ了解  
 セサルノ制度ヲ設クルハ徒ニ行政ニ對スル不信用ノ念慮ヲ喚起スルモノナリト  
 此等ノ非難ハ實ニ十分ノ理由アリテ存スレトモ一方ニ於テハ権限裁判所ノ作用

ハ實質的権限法ヲ闡明スルニ付キ貢獻セル所甚タ大ナリシコトヲ知ラサルヘカ  
 ラス若シ権限争議ヲ裁判スル職責ヲ有スル機關ノ永續的活動ナカリシナラハ如  
 何ニ多數ノ権限問題ニ苦ミタルナルヘキカハ輕々ニ看過スヘキニアラサルナリ  
 行政裁判制度ノ確定セラル、ヤノ権限争議ニ對スル賛否ノ論ハ茲ニ大ニ其氣勢  
 ナ殺カレタルヲ見ル故ニ今日獨逸諸國ニ行ハル、権限法ニシテ一層簡單明瞭ニ  
 編纂セラル、ニ至ラハ將來ニ於テ権限争議ノ制度ニ對スル論争ヲ絶ツコトヲ得  
 ヘキカ

### 獨逸國権限争議制度一斑(完結)



